

人口減少・少子高齢化対策特別委員会会議記録

人口減少・少子高齢化対策特別委員長 土居 昌弘

1 日 時

平成27年10月7日（水） 午後1時31分から
午後2時25分まで

2 場 所

第4委員会室

3 出席した委員の氏名

土居昌弘、御手洗吉生、阿部英仁、木付親次、嶋幸一、後藤慎太郎、羽野武男、
馬場林、吉岡美智子、荒金信生

4 欠席した委員の氏名

な し

5 出席した委員外議員の氏名

な し

6 出席した執行部関係者の職・氏名

な し

7 出席した参考人の職・氏名

ホームスタートやしの実オーガナイザー 土谷修
（おおいたホームスタート連絡会議会長）
ホームスタートやしの実ホームビジター 赤嶺瑞代
ホームスタートやしの実ホームビジター 後藤知美

8 会議に付した事件の件名

別紙次第のとおり

9 会議の概要及び結果

- (1) ホームスタート事業（訪問型子育てボランティア）について、参考人から意見聴取を行った。
- (2) 県内所管事務調査の行程について決定した。
- (3) 今後の調査項目について協議を行った。

10 その他必要な事項

なし

11 担当書記

政策調査課政策法務班 副主幹 阿孫正明

政策調査課調査広報班 主査 上田雅子

議事課議事調整班 副主幹 姫野剛

人口減少・少子高齢化対策特別委員会次第

日時：平成27年10月7日（水）本会議終了後～
場所：第4委員会室

1 開 会

2 付託事件の調査

(1) ホームスタート事業（訪問型子育てボランティア）について

3 協議事項

(1) 県内所管事務調査について

(2) 今後の調査項目について

4 その他

5 閉 会

会議の概要及び結果

土居委員長 これより、人口減少・少子高齢化対策特別委員会を開催します。本日は、子育てに悩むご家庭に寄り添い、地域とつながりをつくる取り組みであるホームスタート事業について、実際にボランティアとして活動をしておられます皆様に参考人としてご出席いただきました。本日は、お忙しい中まことにありがとうございます。これから順番に、ご意見を伺いたいと思いますが、参考人の皆さんには、ふだんの活動内容や県の子育て施策などについてふだん思われていることを、ご自由に話していただけたらと思います。

まずは、本題に入ります前に自己紹介を行いたいと思います。

まずは、委員の右手のほうからいたしますが、私は特別委員長を仰せつかっております竹田市選出の土居昌弘と申します。よろしくをお願いします。

〔委員自己紹介〕

土居委員長 はい、以上でございます。

それでは、参考人の皆様にも名簿の順に自己紹介をお願いします。

〔参考人自己紹介〕

土居委員長 はい、ありがとうございます。それでは、意見聴取を始めたいと思います。本日の流れですが、まず、参考人の皆様のご意見を伺った上で、質疑・意見交換を行います。

それでは、参考人のご意見を伺います。まずは、土谷さんからお願いします。

土谷参考人 はい、何をどう言っているかわからないんですけど、ホームスタート全般は多分ご説明があったと思うんですけど、「今ありました」と言う者あり）私たちのホームスタートが今までの支援の流れと違うというのは、私たちは専門職による支援ではないということ。そして、専門職だけではできないすき間が支援の中に出てくるということに長年の間で気づいて、そこを抑えていくためには、専門職と傾聴をととても大切にしたボランティアが協働していく形をとらないと子育ての間にすき間ができるということを感じているので、そのすき間を抑えていく方法としてホームスタートを取り入れてきました。

一般的に、ホームスタートは、子育て世帯全員が必要かというところというわけではありません。今までのやしの実は、2008年の日本で初めてのテストケースを始めて以来7年間にわたっているわけですけど、大体、生まれてくる子供の数の6%ぐらいの家庭にかかわっています。すなわち、10%以下でほとんどの子育て家庭というのは自分たちで立ち上がって自分たちでいろんな方法を見つけて進んでいくんですけど、どうしてもそこにかかわれない、自分で立ち上がっていけない、専門家が手を伸ばしても、その伸ばした手をつかまえない人たちもいる。そういう人たちを置いていくことはできないということでホームスタートを始めたわけなんですけど、豊後大野市と大分県のこども・子育て支援課のほうにそれに平成24年度からホームスタートの立ち上げの支援を県がさせていただくようになっております。多分皆さんもご存じと思うんですけど、そのかいがあって、県下ではとてもふえていっています。本当にそういうすき間ですけど、子供たちを、家庭を中心にしてスタートさせていく仕組みが全県下に広がればいいなと、今、おおいたホームスタート推進連絡会議というのものもあるわけですけど、12市町で行われていますが、まだまだや

っていないところもいらっしゃるので、その辺が気がついていただいて、優しい子育てと
いうのを進めるための1つの道具としてホームスタートを考えていただければ一番うれし
いと、オーガナイザーとしては考えています。

以上です。

土居委員長 はい、ありがとうございます。それでは、実際にお宅に行って支援をして
いる赤嶺さんから順に、どういうことをされているか、また、そこからどういうことを感
じているのかなどについて説明いただければありがたいです。

赤嶺参考人 私たちは、オーガナイザーに紹介されたお宅を訪問して、子供さんとお母さ
んの手助けというのかな、お話を聞く、傾聴と協働を主に軸にして働かせてもらっていま
す。

土居委員長 はい、その模様からどういうことを感じられますか。

赤嶺参考人 はい、先ほどもちょっと話したんですけど、子供さんが2人いるママがいて、
一緒に食事するというのが最初のことでした。それで、なぜかという、いつも親子3人
で小さい子供と食べていると、つい怒りたくなるって、お母さんが。それで、第三者を入
れて、「いいんよ、こんなことでいいんよ」と言って、「小ちゃい子はみんなこうよ」っ
て言いながら食べると楽しくって、あと、気持ちも楽になったとか、それから、病気にな
った方もいらっしゃるって、夜駆けつけたこともありました。

土居委員長 はい、ありがとうございます。次、後藤さんお願いします。

後藤参考人 私は、今年ホームスタートのビジターの養成講座を受けて、ビジターになっ
て、そのまますぐに1件、お宅のほうに訪問の依頼を受けていきました。私も3人の子供
を今子育て中です。ちょうど今育児休暇をいただいている中で、この養成講座を受けられ
るというのを教えていただいて、こんなすてきな取り組みをされているんだなと思って参
加させてもらいました。もうビジターさん、この豊後大野市のスキームでも30何名ビジ
ターさんがいらっしゃるんですけど、もうこの活動を7年、8年とされていると聞いて、
本当にすごいなと思って最初取り組みに参加させてもらいました。まず、このホームスタ
ートのすごいところはボランティアであるということで、そのことによって、本当に自分
が何で悩んでいるのかわからなくて、本当に子育てが嫌になって、もう自暴自棄になっ
てしまっているときに、こういうボランティアがあるから、有料ではなくて、本当に気軽に
その支援を受けてみようかなって思えるところがこのホームスタートのいいところだと思
うんです。そのビジターの条件として、実際に子供がいる、子育てをしているお母さんし
かなれないんです。なので、同じ悩みを持って育てている、私も今、現に子育てをしてい
て、こういうところが誰かの手があったらいいなと思うところ、そういうところを、今は
特に母子家庭の家は多くて、どうしても母親と子供だけになってしまう。そこに1週間に
一度でも定期的に子育てのことをちょっと知っている先輩が入ってくれて、それでいいん
だよ、間違いじゃないんだよというところを言ってもらえるだけで、私たちが訪問をして
帰った後に、やっぱり子供に優しくできたりとか、ご主人さんに優しい言葉をかけられたり
とか、家庭の中の空気が変わっていくという。私たちはとても本当に皆さんと同じ素人の
立場で、プロではなくて、同じ立場として入れるので、本当に気軽に入れて、それが大き
な問題、例えば家庭内暴力とか、子供の虐待とか、そういうところに至るまで行政の方が
気づけない、そこまで行かないと気づけない家庭の中のことを、保健師さんとかが赤ちゃ

ん訪問に行ったときに、お母さんの精神状態を見て、あ、この家庭はちょっと見ていかな
いといけないというところを気づいてくださって、私たちにつなげてくださるので、私た
ちがまたそこで定期的に訪問する中でその中の問題に気づければ、そこから各機関へと、
こういうところが問題があるので、ちょっと見ていってもらえませんかという、その家庭
の中に入るということが、まずとても難しい現状の中で、このシステムは自然に、それも
利用者さんからの依頼で私たちは入っていくので、スムーズに、問題が重症化する前に、
軽度でその問題の解決をご自分の力で見つけていける、その手伝いとして私たちはお母さ
んの気持ちを聞くことに専念して、お伺いをさせてもらっています。

それで、私たちがホームスタートの活動に行き、行政の方にこんな支援があったらいい
なというのが1つあるんですけども、今、現に私たちもビジターになるために9日間の
研修を受けます、朝から夕方までの。その研修を受けてビジターになることができるん
ですけど、そのときの子育ての状況とか、あとまたいろんな講師の方のお話を聞いて、年
に1、2回ぐらいは意見を出し合ったり勉強会なり等のことをして、やっぱりスキルアッ
プをしていながら家庭を支えていきたいと思うんです、家庭の中に入っていきたくと思
うんです。でも、その研修会というのが、やっぱりどうしても団体ごと、スキームといっ
て各市町村にある個人の団体が個人で計画をして、私たちの研修会を開いてくれるので、
それがもうちょっと国の力でそういう講習会が行えることができれば、私たちビジター
のスキルがもっと上がって、本当によりよい支援になるんじゃないかと思います。私た
ちの位置から、そこから保育園、小学校というふうに子供たちが順調に育っていくんじや
ないかなと、そういうすき間のボランティアに携わることができています。済みません、
長くなって申し訳ないです。

以上です。

土居委員長 いいえ、大丈夫です。はい、ありがとうございます。今日配られた資料、こ
れを若干説明していただけますか。特に利用者の評価の点を。

土谷参考人 本当はあんまり持って来たくはなかったのですが、でも、これを読んでい
ただけなのが1番わかりやすいかなと思いました。

これは、最初に初回の訪問をして、2回目はどなたがこのおうちに入ってくるという紹
介の訪問をして、それから4回ずつビジターが単独で4回行きます。そして、4回目には
モニタリングをかけていく、途中の評価はしていくんですけど、訪問が完全に終わったと
きに、このアンケート用紙を実は置いてくるんですよ。置いてきて、気分がよくなったと
きに書いて出してくださいよと切手を張って置いてあります。それがずっとたまっている
んですけど、各年度から少しずつ取ってきたんですけど、これを読んでいただければ、ど
んな気持ちで利用してどう感じたかというのがわかっていると思うので、私たちが
口で言うよりはこれが早いかなと思って、皆さんに配付しているところです。中には、子
育てにかなり疲れてどうにかかなりそうでしたとか、ほか、もっとひどい内容もあったん
ですけど、苦しい内容があったんです。それ持ってきています。そういう意味で参考になれ
ばと。これが何も飾らない生の利用者からの声です。

それともう1つは、竹田の夢とんぼというホームスタートをやっている組織が、今、ス
キームと先ほど言いましたけど、そこが出している、市内に配っているホームスタートを
利用しませんかというチラシが夢とんぼから出ています。

もう1つは産前サポート試行事業というのは、日本で初めて大分県で、ホームスタートは産後なんですけれども、産前から入っていくというためのビジターさんの2日間の補講講座を計画します。それが果たしてそれでいいのかという試行を豊後大野市で10月、11月とやって、12月にまとめて、今年度中にその産前サポートできるホームスタートの講座を組み立てるつもりで、今そのチラシで、今、豊後大野市では、それを保健師さんが妊娠中のママに配って、利用する人いませんかと説明しているその資料です。以上です。

土居委員長 はい、ありがとうございました。それでは、これから意見交換に入りたいと思いますが、質問ある方ございませんか。

荒金委員 今、後藤さんからお話があったんですが、お子さんが3人おってこういうことがよくできるなと思って感心して今聞いておったんですけどね、自分自身のところも大変やろな。どうなんですかね、まあ要らんことを聞いて悪いけれども。すごいなあと思ってどうなんですかね。

後藤参考人 はい、まず最初、1番最初に興味を持ったのは、そのビジターの養成講座の中に、人に対する、子供、子育てに対する気持ちとか、いろんな学べる講座がたくさん入っていたんです。なので、もちろんビジターになるという大きい目標はあるんですけど、私自身も子育て真っ最中なので、そこを覚えて子育てができるということは、私も子育てをちゃんとしていけると思って、その同時進行なんですけど、それがまた人の助けとか……

荒金委員 お父さんのご理解が相当あるわけ。そうでもないのか。

後藤参考人 でも、私一応受ける前にちゃんと話をしたら、そういうのがあるんやねという、やっぱりまず知らないところからどうしても始まるので、はい。その講座自体は、ビジターにならなくても、今子育てをしているお母さんたちに受けてもらいたいと思うような、とてもいい講座でした。

荒金委員 精いっぱい頑張ってください。

後藤参考人 はい、ありがとうございます。

土居委員長 そのほかございますか。

羽野委員 まず、利用規模、申し込んでくる人たちのその世帯は、ばらばらというか、ひとり親家庭が多いとか、そういった形態がどうかということが1点と、それと、申し込んだ方に対して訪問をするわけなんですけれども、その定期訪問までずっと行きますよね。これは、その申し込んだ方全員、全世帯、申し込んだ方全てにサービス内容は異なるとしても、そういった対応をしているのか。あるいは、その申し込んで来たけれどもそこまでする必要のないというようなことでサービスを受けられない方がいるのか。

それと最後に、先ほど全体的な研修会みたいなことがあったらいいということをおっしゃっていましたが、それ以外に行政に対してこういった支援があればもっといいなということがあれば伺いたい。

土谷参考人 利用の世帯は、特に特定するような内容はないです。もちろん、私たちが入ってきて逆に気がついてくる、世帯のその家族の中での問題というのが私たちには見えるわけなんですけど、それはもうどこでもあるようなこともあるんですけど、特別な状況がない限りは、個人情報の管理とか守秘義務に関してはホームスタートはかなり厳しくやっていますので、それは私たちが管理しています。そして、その中からやはり問題が発展していく

場合は、それは最初の申し込みのところに書いてあるんですけど、本当に必要な場合はこの内容を許可を得て外へ連携をしますということがあるので、その場合はそういうこともあります。

それから、訪問を希望された方には、数日以内にすぐオーガナイザーという世話役がおうちに伺って対応するようにしています。だから、内容を見て対応しないとかするとかではなくて、必ず対応をします。

それから、何か先ほどビジターさん、ボランティアさん全体を集めたような研修ということを経験されたんですけど、実は、おおいたホームスタート推進連絡会議はちゃんとあるわけです。でも、それはほとんどが世話役であるオーガナイザーを中心としたオーガナイザーのスキルアップ、世話役のスキルアップがほとんどです。そして、それぞれの組織からの情報交換、ビジターさん、実際に入っている方のスキルアップに対してはそれぞれの組織が独自でやるか、年に一度行われる九州エリアのスキルアップ協議会、それに頼るしかないんですね。だから、もし九州でも一番多い、あるいは大分でもこんなに広がっているし、ビジターさんは多分、今は200人近くいると思います、県内で。その人たちを一堂に会して、そこで意見交換をしながら聞ける場面があったら私も本当にうれしいなと思うんですが、なかなか今、県のほうが準備してくれるおおいたホームスタート推進連絡会議の中でそこまでのことはできないし、それぞれの組織に頼っている状況です。以上です。

土居委員長 はい、わかりました。

羽野委員 あと悩み、申し込んだ方の理由なんですけれども、ご本人にとっては深刻なことだろうとは思いますが、一般家庭でもほとんど多いような状況に対してそういうふうに感じる方が多いのか。それとも、何らかの要因があって、そういった深刻な事態になると、そこら辺がケースを踏んでこられて気づいたようなことがありますか。

土谷参考人 ケースは、外の人が見て軽かろうが重かろうが、そのひとりの人の感情ではなくて、子育てしているママの気持ちが一番なんで、我々が見てそんなのいいじゃないかというような意見は私たちの中では全く使ってはいけない言葉ですし、だから、応援が欲しいのであれば必ず応援をしに行きます。その内容については、最初の聞き取りから、どういう部分で応援してほしいということもわかってきますし、特に家庭を選んだりとか問題を選んだ応援に行くということはないです、全てに。

羽野委員 1人目のお子さんの親が多いですか、初めての育児体験をする方がやはり申込者が多いですか。2人目とか3人目のお子さんに対する部分よりも多いですか。

土谷参考人 それで、ここの右側に年齢を実は書いてあるんです。ホームスタートは、日本全国でも件数が何千件と訪問があるんですけど、利用される方の8割が30代から45歳まで。20歳代の方は、本当に15%ぐらいしかいらっしゃらない。ということは、最初の方もいるんですけど、2番目、3番目で産む方も非常に多い。特に、最初のお子さんだとすると、もちろんそれも大変です。でも、年子で2番目が生まれたとか、そういうのだったらもっと大変なことが起きるので、特にどちらが多いというのではなくて、逆に私たちが気づくのは、30代後半の方が、35歳から45歳というのは実はもう半分以上を占めている。30歳以上だけでとると8割が30歳以上の方です、ホームスタートの上では。逆に言えば、キャリアの方とか、社会的にはしっかりしている方が、この応援を欲しいと

ということが見えてきているので、そこには、やはりその人のことをちゃんと聞いてあげられる人、その時間をその人にあげられる人、ビジターさんは1日2時間ですけど、週に1回、必ず定期的にそこに行ってくれる、それがそういう人の自立につながるというのは、今までやってきて感じたことです。

阿部委員 ちょっと立ち入って申し訳ないんですけど、利用者は無料ということなんですけど、最初の勉強会のように聞かせていただいたんですけど、立ち上げ時の財政支援というのは大体50万ちょっとぐらいの財政支援ということまでは聞いているんですけど、先ほど赤嶺さんですかね、夜中もお伺いしたことがあるとか。そうなってくると、それぞれそこに行くまでの経費とかはかかるわけですけど、財政支援はどういう財政支援があるのかです。あるとすれば、この今の現状の財政支援で、ある程度これからもこういう活動が、県下全域にそういう活動が広がっていけばいいという1つの方向を示していただいたんですけど、財政支援的にはどうなのか、そこをちょっと。多分言えない部分もあるのかなと。ほとんど今までこういう経費面では1つも出ていない。

土谷参考人 大分県は非常に進んでいる県で、平成24年度からホームスタートの立ち上げの資金を出してくれました。だから、50万円、60万円のお金を立ち上げはやってくれるんです。でも、立ち上げた後の運営は、もう大分県は出してくれません。もちろん、そこまでは私たちも甘えようと思いません。私たちやしの実も、2008年の施行から3年間は何も援助をもらっていません。それでやっています。なぜやれたかという、そこに広場があったからです、保育所があったからです。広場のお金でホームスタートをやるからねと、当時の県の子育て支援課に話したことを覚えています。「使ってもいいかい」と、「いいですよ」って、何かわからんと言ったのかもしれない。でも、それだったら何とか持ちこたえて数年はいけます。1番お金がかかるのは、立ち上げはいいです。立ち上げは、もう本当に50万円ぐらいのお金というのは、人件費ではないですよ。講師を呼んだりとか、養成講座を、通常でも8日間の養成講座です。私たちは今もうちょっと長いんですけど。その費用、講師の費用、会場の費用、そして会議費がかかる。そして、やっぱり広報、まあ、広報はそんなにかからないですけど。それから、ビジターさんが訪問する交通費だけは、それぞれの組織でそれぞれの基準で今出しています。日当はつかないけど、せめて交通費は負担させてくださいと、それぐらいかかります。本当は、先ほどのお話に出た深夜に動く場合はどうするのかと。深夜に動いている組織はそんな多くないと思う。でも、豊後大野は、もう24時間体制で動くように、ホームスタートにかかわった人には全部電話番号を教えます。実際に深夜かかってきて、ちょうど担当だったので、彼女に行っていていただく、そういうケースもあります。そうすると、ホームスタートのオーガナイザーのための少しの補助があればそれが1番いいんですけど、全然そういうことはもう言う気もないんですけど、大分県下では、社会福祉法人がやっているホームスタートもあります。それから、小さなNPOがやっているホームスタートがあります。それぞれの市行政が補助してくれています。その金額はすごい差があります。（「それぞれの何があるの」と言う者あり）それぞれの地方行政、市町村が、豊後大野市が出してくれたり、杵築市が出してくれたり、別府が出してくれたり。でも、それぞれの市で決めているので、みんなばらばらなんです。最初のこれは多分、子育て資金があったんですけど、そういうのがあったんですけど長くは利用できないので、どうしても市のほうが頑張っ

くれています。市が、物事を考えるにはどのぐらいか、それに重きを置くかということ、20万円だったり100万円だったりとかいうことは、もうばらばらです。

阿部委員 やしの実さんは、組織ではどういうふう運営されているんですか。例えば、基金をボンと積んで、社会福祉法人としての別枠があつて、別な例えば保育園とかそういうのがあつて、その組織の中の一環としてこれをやられているのか。例えばですよ。

土谷参考人 申し上げます。私たちは、三重福祉会という社会福祉法人で、幼保連携型の認定こども園が2園と、やしの実広場という子育て支援センター、広場がありますね。それともう1つは児童クラブ。ホームスタートは、そのやしの実広場で始めましたので、今、市の補助金はやしの実広場の第2種福祉事業に入ってきます。その中での運営をしています。

阿部委員 そうすると、大きな組織という見方であれば、保育園があり、そういうのがあるわけですね。広場も、その保育園の社会福祉法人の枠の中で運営はされておるといことですね。

御手洗副委員長 すばらしい取り組みをされているというふう思うんですが、関連しますけど、社福の、今お聞きしますと社会貢献事業の中の一環なのかなというふう思っておりますけれども、利用をされる方々は無料、これはよく分かりました。やはり、じゃ、携わる方々、皆さん方はボランティアということなんですかね。

土谷参考人 はい、そうです。

御手洗副委員長 ボランティアですね。やはりそれで長く続くというのは、可能なんですか。僕は、これを持続的に長くやるとなれば、やはり有償、定額有償ボランティアとか、こういう形も必要なのかなというふうにはお聞きしながら思ったんですが、どうなんですかね。

土居委員長 ちなみに、交通費とかどれぐらいいただいているものか、教えていただければ。

赤嶺参考人 私も第1期生で、7年続けております。それで儲かろうとか、そういうことは思っていないです。月1度、ティーパーティーって、先生のところでお茶を飲みながら、みんなビジターさんが集まって意見交換とかお勉強ができるんです。そういう楽しみがあるから続けられるんじゃないかなって思います。みんなお金じゃなくて、自分の勉強と人の役に立つ喜びがあるからできるんだと思います。

御手洗副委員長 このようなすばらしい事業、仕事をやっているわけですから、長く持続してやってというのは行政も皆さんが思うことだというふう思うんですよ。そういう中で、やはり定額の交通費とか、あるいはお茶代とか、燃料代とか、そこらはボランティアですけれども、有償のボランティアというところで長続きを私はしたほうがいいんじゃないかなというふう思いますし、行政からお聞きしますと幾らか助成が出ているわけですから、社会福祉法人は地域に貢献しなきゃいけないという使命感もありますので、地域貢献という形からすれば、1番いい事業をされているのかなというふう思っておりますので、ご苦労されている。だから、こうやって活動することによって、子供が安心して生活できるような家庭が築けりゃいいかなというふう思っています、今楽しみにして聞きましたんですけども。

土居委員長 ちなみに、土谷さんティーパーティー代はどうしているのですか。

土谷参考人 ティーパーティー代は、ほとんどみんな自分たちで持ち寄るとか、コーヒーはまあ施設が出すんですけど、お茶菓子を持ってきたり、季節の果物を持ってきたり、煮物を持ってきたりして、ぎょうさん集まってくれます。先ほど少しお話したんですけど、やはりビジターさんは、いろんな内容を聞いてしまって、ストレスのある家庭の内容を全部受容して聞くので、やはりそういう場面がとても必要になってきます。

嶋委員 毎週1回、1カ月の訪問、いわゆる傾聴と協働で、いわゆる家庭環境というのは改善されると思うんですけど、あと半月行ったほうがいいかなとか、もう一回りしたほうがいいかなとか、専門家の支援ではすき間ができるとおっしゃっていましたが、あと2回行くことによって、このすき間が埋められるんだとかいう場合があるんだと思うんですが、そういうときの対応って割と柔軟にできるんですか。

土谷参考人 それは、ホームスタートがほかの支援の内容とやり方と違うのは、全部ツールがあるんです。そこに書式があってシステムがあります。ですから、4回の訪問でこの方に効果が出ているか出ていないかというチェックする方法があります。それは、効果があるかないかというのはビジターさんが1番最初に感じるんですけど、最初にその家庭と訪問接触したオーガナイザーが4回終わって入ることで、その差は感覚的にもわかるし、チェックリストを使って調べることもできます。それで、客観的に評価が出る。そのときに私たちが、「ああ、大丈夫だな」と思ったら、おうちの人も、「もう大丈夫、だからしばらく1人でやってみる」と言ってくれるんです。逆にそうでない方は、もう行ったらわかるし、ビジターさんがすぐわかっているんですけど、そして4回目に、私たちがやはりモニタリング訪問をしたときにさらについて欲しいければ、もう4回続けます。そして、それでもだめならもう4回続けます。幾らやっても効果が出ないときは、傾聴と協働だけをやるホームスタートだけでは、単独では対応できない問題があるということになるので、そこからは、利用する人とビジターさんとオーガナイザーで相談をして、市の専門機関につなぐとか、県のそういう児相につなぐとか、そういうふうな動きも実際に行われています。

嶋委員 最大、じゃ、12回行って最終的に。

土谷参考人 いいえ、最大というのは決めていないんです。一つの区切りが4であるだけで、何カ月も行ったことはあります。さっき夜中に電話来る方も、何カ月も入っています。一応もう終わったんですけど、もう今は元気に、子供さん2人を元気に育てて保育園に。お仕事にも携わっているんですけど、そこまでつき合えるのがホームスタートです。

嶋委員 根気よくやらないとなかなか。

土谷参考人 ええ、無償です。

嶋委員 分かりました。

土谷参考人 済みません、無償でなればできないことが私たちもよくわかっているので、今さら有償にしてやる気は全然ないし、ビジターさんもきっとそんなことは考えていないと思います。ただ、研修とか、先ほどお話ししたお茶代とか、交通費をもう少し出せるとか、そういうことは、やはり市行政からもう少し補助金が多かったらできるのになと思っています。組織はたくさんあると思います。

馬場委員 2つほどお聞きしたいのですが、例えば、ご夫婦でいらっしゃる家庭で女性の方が育てるというのは中心になっていると思うんですけども、ただ、お聞きしている中

で、例えば旦那さんのほうにもやっぱり必要だなとかいうお話がその子育ての中でいろんな感じることもあると思うんですけども、そのお母さんの話をお聞きして、そしてそれを返していくとか、ご夫婦、ご主人のほうにも返すというようなことはないのかなというのが1つと、それから、母子家庭の方が多いいというふうにも書かれていたんですけども、その方たちが、例えば夜中にもやっぱり相談があるとかいうことが多分あると思うんですけど、そういう場合に、時間的にはそういうケースというのはかなり多いのかなという、どういう実態なのかなというのが1つで、最後は、その利用している人たちの交流とかいうのが、それぞれ受け持たれていると思うんですけども、その子育てされてる方たち同士の交流とかいうのがないのかなという、それはこの制度からはしないという形なんですかね。

土谷参考人 前半のほうはビジターさんに聞いてもらったほうがいいと思うし、後半のほうだけなんですけど。

利用された方の交流というのが意外とアンケートにも出てきているので、僕は逆にびっくりしているんですけど、利用されている方は、最初のころは利用していることを誰も言いたくないのかなと思ったんですが、それをしたいという意見とか、ビジターさんの後藤さんはそういう声も聞いてきているので、ちょっと考えていこうかなと思っています。

赤嶺参考人 私たちが最初、東京から西郷先生って始められた方が見えて講習を受けたときには、後つながりはないようにするように聞いたんですよ。でも、豊後大野市は小さいまちですから、後つながりがないということはないで、どこかでお会いするんですよ。今度七五三なんよとか、運動会だった、小学生になったと写メをくれるんですよ。何か孫みたいで楽しくて。こういうボランティアをやっていてよかったな、私いつもそう思うんです。

土谷参考人 委員長いいですか。

土居委員長 はい、どうぞ。

土谷参考人 今のお話なんですけど、一応ホームスタートとしては、けじめをつけるように、訪問中は連絡先等は全部その組織の連絡先になっています。個人の連絡先を渡さないようにして。名刺とか名札も用意しますので。名札はつけません、危ないから。名刺を用意してもらって、それは、何かあったらここへ連絡してくださいと言って、例えばホームスタートやしの実の電話番号だったり僕個人の電話番号にしています、緊急のときはそこにしてということで。終わるまでビジターさんは自分の電話交換はしないように。終わったらもう地域ですから、無理がなければ、あげるのが嫌でなければやってもいいんじゃないということでやっています。

それから、訪問中にママの買い物のお手伝いをしたときに、私も買い物をしていいですかという意見があったりするんですけど、それはだめって、一緒に買い物したらだめよと、自分の買い物はだめよと言っています。自分の買い物は後で行ってくださいと、そういうふうに一応けじめをつけています。それ終わったらあとは地域の友達ですから。

馬場委員 そうすると、例えば、訪問した利用者の方と一緒に買い物をしたりとか、そういう場合もかなりあるんですか。

赤嶺参考人 希望されれば一緒にも行きますし、子育て支援センターだとか、お医者さんとかにも一緒に行きます。

後藤委員 何点かお尋ねしたいんですけど、さっき土谷さんが言われたチェックリストとかツールというのは、それはやしの実さんだけのものなのか、全国的なそういうやり方とかがあるのかというのをまずお尋ねしたかったのと、それから、その8日間の研修というのは、連続で8日間受けないといけない。例えば、何かまかに区切って、何日間かで受けても、ビジターさんとして一応研修を受けたとかということになるのかということをお尋ねしたかったのと、あと皆さんすごい志の高い方だと思うんですけども、もともと何をされていたかという、やしの実さんのホームビジターさんの背景といいますか、仕事をされている方はこういうホームビジターさんに向いているとかというのがもしあれば教えていただきたい。

土谷参考人 ホームビジターさんになっていただく条件は、子育て経験があるというただ1つ。専門職だったり学校の先生だったりする必要は全くなくて、子育て経験があるということがただ1つの条件です。それがないとビジターさんにはなっていないところなんです。

それから、講座は、やしの実だったら9講座を全部終わって、講座ごとに全部振り返りシートというのもあるので、それ出していただいて、全講座終わって最後に試験を受けていただいて、その結果認定となります。1講座でも休まれた方は、次年度またお願いしますねということにしています。

そして、マニュアルやツールは、ホームスタート・ジャパンという組織が2009年に東京でできていますので、そこは実際の訪問をしているわけではなくて、全国からのデータを集めて、また逆に配付するとか、それから、このツールを全国からの意見を聞いて改良するとかいうことで、ツールは全国共通です。

後藤委員 済みません、ちょっと言い方が足りなかった。例えば、子育てをした方というのが条件としてあるんですけども、結果としてやしの実さんに集まっているビジターというのは、例えば、実は幼稚園の先生が多かったとか、何か学校の先生が多かったんだとか、何かそういう共通してそういったホームビジターさんになれる資質みたいなのがあれば、土谷さんにそれをお尋ねしたかったんですけど。

土谷参考人 資質というのは当初から求めていませんし、やしの実さんは全部公募で、市報とかチラシをスーパーで配って、最初のころは市報も載ってくれなかったんで、トキハとか新鮮市場に配ったりしながら募集していたんですけど、ごく一般の人です。そして、今は結果的には助産師さんがいたり、栄養士さんがいたり、学校の先生を終わった方がいたり、保育士さんがいたり、保健師さんがいたりとかするんですけど、ビジターさんとして入っていただくときはビジターさんに、その9日間の講座でビジターさんになっていただいています。（「まあ、思いが強い方だということなんでしょう結果としては、そういうことになるんでしょうか。何とかしてあげたいとかという」と言う者あり）はい、そうだと思います。自分も苦労したし、そういう必要な人がいれば、自分たちにできることがあったらやろうと。

後藤委員 わかりました。ありがとうございます。

阿部委員 さっきの後藤委員の質問と関連するんですけどね、土谷さん自身は、三重福祉会の何か役員とか、職員とか、そういうのに入ってますか。

土谷参考人 僕は、すがお子ども園の園長です。

土居委員長 認可協の理事です。

阿部委員 ああ、そうですか。そういうあれがあるんですね。

吉岡委員 私は、すごい素晴らしい取り組みだなと思っています。今、ネットの中でできない若い方もいらっしゃる中で、こうやってやっぱり顔を突き合わせて心と心と、やっぱり共感するということが訪問先のご家庭では、説教とか立派なことではなくて、ともに苦勞している様子をわかってあげたり、共感して認めてもらうという、多分、子育て中のお母さんたちは、自分の存在価値を、きっとその狭い中でじゃなくて、やっぱり人に知ってもらいたいというのがあると思うんですね。そういう中で、ビジターの皆さんが訪問をされるということは、すごいやっぱり勇気が出てくるし、また、自分たちも何かお役に立ちたいという。無料というのは、やはり何か役に立ちたいという、社会の役に立ちたいという、それがやっぱり1番かなと思っていますので、ますます頑張ってくださいなど、私からのお願い、要望です。

土居委員長 そのほかございますか。よろしいですか。行政に対する要望というのは、先ほど出た限りでよろしいでしょうか。

赤嶺参考人 10分か15分程度のホームスタートのビデオをつくっていただきたいんです。ホームスタートも各地で取り上げていただいているんですけど、広報がまだまだなんです。豊後大野市では、赤ちゃんが誕生したときに、保健師さんが赤ちゃん訪問をするので、私もときどき一緒させていただいて、そのときにチラシとか冊子を保健師さんが赤ちゃんのママにあげるんですが、そのときに、ホームスタートのチラシも一緒に入れて私説明するんです、こういうのがあるから利用してねって。そしたら、「はい」とかは言ってくれるんですけど、まだホームスタートって何か、私のつたない説明だけじゃよくわからなかったんでしょうけど、反応がはかばかしくないんです。よその県から来られて赤ちゃんを2人いる若いママに、ああ、こんな人が利用してくれたら一緒に子育てセンターに行ったりできるのになと思うんだけど、ううんという感じで申し込んでくれないんです。このビデオを若いパパやママが集まる場所、赤ちゃん広場とか妊婦さんの相談会とか、それからすくすくひろばとか、豊後大野市でいえばそういう子育ての場があるんですが、そこで、そのビデオを見せてくださると、何回聞くよりも見たほうがわかりやすいと思うんです。それで、それを県がつくっていただいて、興味を持っているというか、ホームスタートしたいなという市や町村に貸すなり差し上げるなりして、広げてくださると、豊後大野市でもそういうパパママひろばのときに、ちょっと時間をいただいてそれを見ていただいて、ホームスタートこういうのがありますというのをしたら、うれしいなと思っています。

土居委員長 はい、分かりました。後藤さんなんか無いですか。

後藤参考人 はい。

土谷参考人 最後に、最後にじゃないですけど、ホームスタートがうまく機能していくために、あるいは本当に隅から隅まで行き渡るには、実は行政の協力がとても必要で、私たちは、どこに誰が生まれたか知ることはできないんですよ。1番知っているのは、保健師さんが知っています。母子手帳を最初に渡す保健師さんは、どこに誰が生まれて、保健師さんたちは全戸訪問をするので、問題がよくわかるんです。だから、母子保健の担当の保健師さんとホームスタートの組織ががっちり組むことで、できるだけ多くのところに、

今まで手が届きにくかったところにも手が届くようになると思うので、行政のほうで、母子保健の保健師さんとホームスタートが協働できるように、そういう配慮ができれば1番うれしいなと思います。

土居委員長 はい、分かりました。その他、何かありますか。よろしいですか。

本日はどうもありがとうございました。貴重な意見をいただきました。ホームスタート事業をするに当たっては、やはり行政の、保健師の皆さんとの連携などとても重要ですし、ビデオ等での啓発、さらにはホームビジターの皆さん方のスキルアップ、研修、どうしていくのか、さまざまな課題をいただきました。本委員会でもまた議論をしながら、県政に生かせるよう頑張っていきたいと思っております。また皆さん方のご活躍、心から願っております。ありがとうございました。

この後、県内調査の打ち合わせがあるんですが、その前に皆さん方と記念写真を撮りませんか。よろしいですか。

後藤参考人 はい。

〔写真撮影〕

〔参考人退室〕

土居委員長 次に県内事務調査について事務局から説明します。

〔事務局説明〕

土居委員長 参加される委員はよろしく申し上げます。今後の調査計画についてですが、前回の事務局の説明にもありましたが、子育て支援施策について今後調査したい項目などございましたら、ご意見をこの場で申し上げます。よろしいですか。

〔「委員長一任」と言う者あり〕

土居委員長 今後の調査項目につきましては、私に一任ということでよろしく申し上げます。この際、ほかにありませんか。

〔「なし」と言う者あり〕

土居委員長 はい、ないようでありますので、これをもって本日の委員会を終了いたします。お疲れさまでございました。